普及センターだより

田んぼに行こう

アイガモで除草をする農法

日本人の主食であるお米

皆さんの周りにたくさんの田んぼがあると思います。ここ山武郡は県内でも有数のお米の産地です。

一粒の米が稔りの秋には、田んぼで何粒の米になるのでしょうか？新米の出来るまではまだ少し時間があります。ちょっと考えてみませんか？田んぼと米のことを!!

今、田んぼでは

七月はちょうど米の粒数が決まっていく大切な時期です。六月の終わりから七月の始めにかけて、稲の茎の中に小さな穂ができ始めます。この穂が一cmの時に肥料と水をやり栄養をつけることによって、一穂につく粒数がきまり、粒の大きな米を作るのです。また、七月の下旬からは稲の花が咲く時期です。稲の花は天気の良い日の日中、二～三時間、籾が開いて雄しべと雌しべが出るという目立たない花です。

この時期は稲にとって一番大事な時期ですが、無防備で病害も受けやすい時期でもあります。花が咲く前に病気が出ていれば、治しておく必要があります。

この時期の稲はちょっとやそっと引っ張ったところで抜けないほど根が張っています。「稲作りは根作りである」と篤農家の人は言います。立派な根は土作りと水管理で出来上がるのです。

大型機械による刈りとり作業

新しい栽培技術

その昔、米を作るには八十八の手間がかかったといいます。今も米を作るためにいろいろな作業を行いますが、新しい機械や技術の開発により、短い時間で作業を終える工夫がされています。

ニュータイプの肥料

米を作るには、苗を植える前（基肥）と穂のもとが出来るころ（穂肥）、途中肥料が切れればその間にも肥料を施します。田んぼの中を重い肥料をもって撒いていくのは大変な仕事です。苗を植える前に使った肥料が穂肥の時期まで効果が続くという肥料が出てきました。品種やほ場に合わせて七十日タイプ、百日タイプと選べるようになっています。

新しいタイプの肥料開発に着眼し、経営改善に取り入れてみましょう。

省力をめざす直まきの栽培

苗を作ってそれを田んぼに植えていくのが一般的ですが、苗を作らないで直接田んぼに種を蒔いていく方法があります。この方法だと苗を作る手間と田んぼに苗を運ぶ手間が省けます。

同じ時期に植えた稲より収穫期が約十日遅くなるので刈り取り期間の幅が広がります。直まきは難しい技術というイメージがありますが、栽培技術の開発や水管理の改善によって、経営に取り入れる可能性が高まってきています。経営面積を増やし、低コスト稲作をめざし、この栽培方法を取り入れる人が増えてきました。

太古の昔から作られてきた稲

昔の人の努力と工夫の歴史の最先端が今の稲作です。

米を作っている人も作っていない人も、田んぼへ行こう!!さわやかな風が吹いているから!!

農畜産科　荒木田信子

お問い合せは
普及センター
松尾駐在
☎86-4121～2へ

答え　1500粒
にぎりずし三個分です。
お米は上手に作ると　こんなに増えるのです。